

# 大東文化大学 東洋研究所所報

2017.7 No.67

## 目次

新 所長の挨拶 東洋研究所 所長 岡崎 邦彦…1・2	2017 年度 人事・名簿……………7
2017 年度 東洋研究所共同研究課題……………2・3	新刊案内……………8・9・10
2016 年度 東洋研究所共同研究班活動報告 ……4・5	2016 年度 東洋研究所会議報告／理念・目的 ……11
〔国際交流講演会〕朝鮮朱子学の特質一心に対する探究 東京大学大学院人文社会系研究科助教 金 光来…6	2017 年度 東洋研究所 公開講座のお知らせ ……12

## 新 所長の挨拶

東洋研究所 所長 岡崎 邦彦

本年4月1日付をもって東洋研究所所長を拝命いたしました。東洋研究所は1923年（大正12年）2月に創設された「大東文化協会」を前身としております。その後、1961年に大学附置の「東洋研究所」となって現在に至っております。わたしは1978年4月、研究所助手として入所し、以来40年近く中国共産党史の研究を続けてまいりました。その間、研究所所長は土井章、中嶋敏、岡倉古志郎、古島和雄、遠藤光正、松本照敬、福田俊昭、山田準、中林史朗へと交代し、その指導の下で研究を続けてまいりました。

土井章は満鉄調査部から、戦後はアジア経済研究所の設立などに係わり、本研究所においては中国経済研究の主任研究員として貢献されました。中嶋敏は東洋文庫を経て東方文化学院東京研究所に勤務され、さらに戦後は「宋代食貨史」研究を大成されました。岡倉古志郎は東亜研究所、世界経済研究所を経てアジア・アフリカ研究所を主宰しておられました。古島和雄は東京大学社会科学研究所を退官され、本研究所研究員に就任されてからは、専任研究員の地位の確立と共同研究組織の基礎を築かれました。遠藤光正、福田俊昭は、『藝文類聚』を創刊いたしました。松本照敬は現在、成田山財団理事長として教育、福祉、文化面で貢献されておられます。また、山田準、中林史朗は

本学教授、本研究所管理委員として研究所を運営する上で重要な役割を担っておられます。

各所長は、各共同研究班の活動について手厚く配慮し、しかも専門領域の異なる研究員との相互交流を奨励しました。その意図するところは、鐵井慶紀（中国古代思想史）が1986年『東洋研究所所報』「談話室考」で次のように説明しております。すなわち、研究所を「発想の『ハイブリッド（異種交配）』の場」であると位置づけ、「新しい生命力をもった発想の新種を開発していかなければならない」、それには「異質な価値ある雑種強勢との出会い、すなわち対談を普段から心がけておく必要がある」と説明し、その場を提供しているのが東洋研究所であり、所長であるとしたのです。古島和雄所長はこれを大学の「サロン」と呼び、遠藤光正は「他流試合をせよ」と激励したものです。

2017年度、研究所では7班の共同研究班が活動しており、それぞれのテーマは「20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同」、「日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして」、「西洋植民地主義再考」、「唐・李鳳撰『天文要録』の研究」、「茶の湯と座の文芸」、「イラン文化圏における50年の社会・文化変容の研究—フィールドから歴史へ」、「岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」」であります。また、こ

れら研究班の中には専任、兼担、兼任研究員ばかりでなく、大学院生や他大学の教員、さらに企業や官庁などから自主参加しておられます。

最後に、もう一つ研究所にとって重要な使命があります。中嶋敏は（1981年）大学附置研究所20年の記念号刊行に際して、「研究所の学術活動は大学の学的水準を高めるものであり、大学の声価を上げるものでなければならない。このような認識と自覚とをもって、われわれは研究所の運営を推進していくことを期する」と挨拶しています。「大学の声価を上げる」努力は、研究班の研究報告会や刊行物もありますが、また大学地域連携センターと協力した公開講座を開設しており、今年で32年の歴史があります。さらに、われわれの先輩研究

者の中には大学を定年退職したのちも自主的に研究会を主宰するなど、地域や学界へ向けて公開研究の活動を続けておられる先生もいるのです。こうした活動が私たち研究所員の励みとなっており、「大学の声価を上げる」大きな原動力となっているのです。

2023年2月、東洋研究所は大学よりも半年早く100周年を迎えることとなります。それまであと6年ですが、変化発展しつつある日本と世界をにらみ、研究所の創立理念を進化させ、研究者の研究力の強化、高度な研究領域の創造、地域への貢献などみなさんの期待に応えていくよう心掛けてまいります。（敬称略）

（東洋研究所 教授）

## 2017年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同
	期間 2015～2017年度（研究期間中）
	メンバー（20名） 團岡崎邦彦〔主任〕 団村井信幸、葛田知秀、高英雄一、篠永宣孝、田中寛、齊藤哲郎、内田知行、柴田善雅、鹿錫俊 団伊藤一彦、上野英詞、植松希久磨、嶋亜弥子、由川稔、鏡屋一、江崎隆哉 団小島麗逸、近藤邦康、中島宏
概要	研究班の研究計画は3年間の短期計画と10年をかけた長期計画から構成される。 まず3年間をめぐり、20世紀依頼の日中関係、中国の対外政策、内政、さらにそこで提起された「世界大同」の事実を検証する。 20世紀中国は、帝国主義への抵抗から、建国後平和共存の五原則の提起へと対外関係（世界認識）を変化させ、また中国国内の対内改革は、民衆の自由、社会主義建設を巡って大きく変貌を遂げてきた。その間、平和共存の中国外交や人民公社などの新たな世界、社会モデルが提起され、社会の共存とそれを支える文化革命が求められてきた。これを現代中国の「世界大同」の創造の一部とみて、これを検討していくことである。 さらに中国20世紀以来の対外抵抗、対内改革と日本は深く関わりをもっており、課題も多いが、日中間で「世界大同」のモデルを経済から政治、さらに文化面へと実践していくことも可能である。 10年長期計画については、1921年から2021年の中国共産党史の資料整理と100年史研究を進める。
第2班	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして—
	期間 2017～2019年度（継続）
	メンバー（10名） 団中林史朗〔主任〕 團田中良明 団日吉盛幸、浜口俊裕、小塚由博、藏中しのぶ 団福田俊昭、芦川敏彦、大兼健寛 団成田守
概要	本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。
第3班	西欧植民地主義再考
	期間 2017～2019年度（継続）
	メンバー（5名） 團山田準〔主任〕 団滝口明子、齋藤俊輔 団岡倉登志 団生田滋
概要	西欧植民地主義の成立、発展、思想的背景については数多くの研究がなされて来た。これら西欧植民地主義の歴史研究はヨーロッパと新大陸つまり大西洋世界、ヨーロッパと旧大陸つまりインド洋と太平洋世界を対象とし、それとは別に植民地宗主国の歴史研究が存在した。これら大西洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からはインド洋と太平洋世界における植民地主義が見えてこない。 逆にインド洋と太平洋世界における西欧植民地主義の歴史研究からは、大西洋世界の植民地主義は見えてこない。そこでこの研究班では、大西洋世界、植民地宗主国、インド洋と太平洋世界の3大研究対象を比較統合し、西欧植民地主義を再考することを目的に、いくつかの個別的研究を分担して研究しようとするものである。

第4班	唐・李鳳撰『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）
	期間 2016～2018年度（研究期間中）
	メンバー（11名） 團小林春樹〔主任〕 團田中良明 団渡邊義浩、小坂真二、小林龍彦、中村聡、中村士、細井浩志、山下克明 団進藤英幸、濱久雄
概要 前田尊経閣文庫蔵、『天文要録』（唐、李鳳撰、第二冊（「日占」）、さらには第三冊（月占）の訓読・訳注作業をおこない、その成果を『「天文要録」の考察〔一〕』（2011年3月）、『「天文要録」の考察〔二〕』（2016年3月）に続けて、『「天文要録」の考察〔三〕』として上梓する。	
第5班	茶の湯と座の文芸
	期間 2017～2019年度（継続）
	メンバー（14名） 団藏中しのぶ〔主任〕、藏田明子 団相田満、安保博史、矢ヶ崎善太郎、三田明弘、高木ゆみ子、フレデリック・ジラルール、王宝平、オレグ・プリミアニーニ、菅野友巳、笹生美喜子、松本公一、布村浩一
概要 2004（平成16）年度～2006（平成18）年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および2008～2011年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 巻一注釈』～『茶譜 巻七注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間の成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。研究分担者は、科研費研究から継続して参加する藏中しのぶ（日本文学・上代中古文学）、相田満（人文情報学・中古中世文学）に加えて、安保博史（日本文学・近世文学）、矢ヶ崎善太郎（建築史・茶室建築）、三田明弘（日本文学・中世文学）、笹生美貴子（日本文学・中古文学）、松本公一（日本美術史）、布村浩一（日本文学・中古文学）、パリから高木ゆみ子（日本歴史学・茶道史）、フレデリック・ジラルール（仏教思想史）を兼任研究員に、研究参加者には飯島奨（文化人類学）、加藤泰加子・北井千鶴（裏千家茶道パリ支部）、を加え、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。	
第6班	イラン文化圏における50年の社会・文化変容—フィールドから歴史へ—
	期間 2015～2017年度（研究期間中）
	メンバー（14名） 団吉村武典〔主任〕 團山田準 団原隆一、鈴木珠里、南里浩子、林裕、斉藤正道、中村菜穂、星山幸子、吉田雄介、アブドリ・ケイワン、石井啓一郎、ソレマニエ（福元）貴実也、深見和子
概要 イラン文化圏とは、現在のイラン国を中心に、周辺のアフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含む文化圏をいう。 イラン系民族、ペルシア語系言語、太陽暦の春分を新春（Nouruz）として祝う生活リズムなどに特徴がある。イスラムがこの地を支配するまでは、ゾロアスター教が主たる宗教でもあった。ここでは「ノウルーズ文化圏」と呼ぶことにする。それは、インド文化圏、中央アジア・トルコ文化圏、アラブ文化圏など隣接する周辺の文化圏との歴史的交流のなかで育まれたものである。ここでいう文化、文化圏とは、人間の生活舞台である自然生態環境、生業を基盤とした経済活動、その上に展開する社会や文化を含む総体を意味している。 本研究では、イラン文化圏を中心に置き、それをとりまく周辺の文化圏と重なりあう混合地域にも注意を払う。なかなか変わりにくい基層文化、近現代における外から押し寄せてくる西欧近代化の波や、今日のグローバル化の大波によってあまたしく変化する表層文化の動きが観察できる。ここでは、基層と表層の両者の相互作用の過程が大きな変化要因であることを考察する。研究視座は、現在のフィールド現場から出発して過去へと時間を遡航するかたちで研究をすすめたい。 第2期の3年目にあたり、先輩たちの研究成果や手法などを総括し、自らの新しい研究視点や手法を確立し、その成果を論文や単行本の形で積極的に表現していきたい。	
第7班	岡倉天心（覚三）にとつての「伝統と近代」
	期間 2015～2017年度（研究期間中）
	メンバー（8名） 団田辺清〔主任〕 団宮瀧交二、篠永宣孝 団池田久代、岡倉登志、岡本佳子、依田徹、佐藤志乃
概要 岡倉天心（1862-1913）は、幼時より漢籍とヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を目指した。 1886年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、1890年校長に就任した。この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、帝室技芸員選抜委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、1898年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を旨として美術運動をおこした。1904（明治37）年、大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、1905年同館の東洋部長となり、1906年ニューヨークで『茶の本』を出版、の年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、1907年文部省美術審査委員会委員となり、1908年国画玉成会を結成、1910年東京帝国大学で「泰西巧芸史」を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて1912年インド、ヨーロッパを経て渡米し、1913（大正2）年、病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』（1903）、『日本の覚醒（かくせい）』（1904）、『茶の本』（1906）など、外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。 岡倉天心研究は、まだまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めていきたい。	

## 2016年度 東洋研究所共同研究班活動報告

<b>第1班</b>	東洋における異文化の本質的相違性に関する研究										
	研究員が集まらず、研究会が開催できなかった。										
<b>第2班</b>	20世紀・21世紀における日中関係と中国の対外抵抗・対内改革・世界大同										
	No.	研究テーマ(発表・演題等)				開催日時	開催場所	参加人数			
	1	①上野英嗣「南シナ海の現況：フィリピン提訴の仲裁裁判の行方と中国の対応」 ②岡崎邦彦「西安事変と中国共産党」 ③その他 第2班と小島麗逸「中国経済研究会」との合同研究会				4月23日	大東文化会館301	21名			
	2	①由川稔「モンゴル国のマクロ経済概況と国際開発金融の動向」				6月25日	大東文化会館401	16名			
	3	①岡崎邦彦「歴代中共党主席と習近平政治」 ②植松希久磨「中国語新語研究——熟語について」 ③鏡屋一「現代中国における『歴史』の振り返り方について——『重走長征路』現象をめぐって——」				10月22日	大東文化会館401	21名			
	4	①上野英嗣「南シナ海仲裁裁判所の裁定とその後の展開」について ②その他 第2班と小島麗逸「中国経済研究会」との合同研究会				12月17日	大東文化会館301	21名			
	5	①伊藤一彦「中国における朝鮮戦争の再評価」				3月11日	大東文化会館403	16名			
【備考(刊行物等)】											
<b>第3班</b>	諸外国における東西文化研究										
	研究員が外国人中心のため、日本に在住していないので集まることができず、研究会が開催できなかった。										
<b>第4班</b>	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心に—										
	No.	研究テーマ(発表・演題等)			開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ(発表・演題等)		
	1	『藝文類聚』巻45 訓読			4月23日	東洋研共同研究室	9名	6	『藝文類聚』巻45 訓読		
	2	『藝文類聚』巻45 訓読			5月21日	東洋研共同研究室	8名	7	『藝文類聚』巻45 訓読		
	3	『藝文類聚』巻45 訓読			6月18日	東洋研共同研究室	8名	8	『藝文類聚』巻45 訓読		
	4	『藝文類聚』巻45 訓読			7月23日	東洋研共同研究室	10名	9	『藝文類聚』巻45 訓読		
	5	『藝文類聚』巻45 訓読			9月24日	東洋研共同研究室	7名	10	『藝文類聚』巻45 訓読		
							11	『藝文類聚』巻45 訓読			
【備考(刊行物等)】『藝文類聚(巻四十五)訓読付索引』(2017年1月30日発行)											
<b>第5班</b>	西欧植民地主義再考										
	No.	研究テーマ(発表・演題等)				開催日時	開催場所	参加人数			
	1	2017年度研究活動計画と近況報告				5月10日	大東文化会館	4名			
	【備考(刊行物等)】										
	・滝口明子著 「欧米茶書の中での東洋——オーヴィントン『茶論』研究——大東文化大学紀要 第55号 pp.161-178 2017.3発行 ・齋藤俊輔 分担 小泉康一、川村千鶴子共編『多文化「共創」社会入門——移民・難民とともに暮らし、互いに学ぶ社会へ』(齋藤俊輔 第4章担当「多文化共生の担い手を育てる——群馬県大泉町での日本語教育」) 慶應義塾大学出版会 ・齋藤俊輔 分担 「16世紀のポルトガル領ゴアと在地村落、そして年貢——ポルトガルのアジア進出における領土支配の重要性について」 太田信弘編『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所 ・齋藤俊輔 共著 『2016年度全学プロジェクト事業(公募採択事業) 多文化共生リーダー養成プログラム(MLP) 推進事業報告書』大東文化大学外国語学部										
<b>第6班</b>	唐・李鳳撰『天文要録』の研究(訳注作業を中心として)										
	No.	研究テーマ(発表・演題等)			開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ(発表・演題等)		
	1	『天文要録』巻4 訓読▶訳注作業			4月9日	東洋研共同研究室	3名	6	『天文要録』巻4 訓読▶訳注作業		
	2	『天文要録』巻4 訓読▶訳注作業			6月11日	東洋研共同研究室	3名	7	『天文要録』巻4 訓読▶訳注作業		
3	『天文要録』巻4 訓読▶訳注作業			9月17日	東洋研共同研究室	3名					
【備考(刊行物等)】											
<b>第7班</b>	茶の湯と座の文芸										
	No.	研究テーマ(発表・演題等)			開催日時	開催場所	参加人数	No.	研究テーマ(発表・演題等)		
	1	点茶前座中置合事 四疊半一疊半			4月	大東文化大学 1-0508 教室	10名	11	水指異名大概 附図		9月
	2	茶碗ノ中茶入①組置合事			毎週火曜			12	茶入袋ニ入様之事		毎週火曜
	3	茶点前三疊大置合事 附小棚茶具			5月		10名	13	同蓋之図		10月
	4	水指棚茶具置合事 附水指蓋置様			毎週火曜			14	同袋之緒結様事		毎週火曜
	5	杉曲物水指之事 附利休木具道具			6月		10名	15	耳付弦付茶入取扱事		11月
	6	水指蓋取手図			毎週火曜			16	金林寺寸切事		毎週火曜
	7	手桶③釣瓶点茶之時取扱事			7月		10名	17	袋之緒長短之事		12月
	8	片口水指ニ用取扱事			毎週火曜			18	棗類異名并図 附棗箱寸法		毎週火曜
	9	水指異名大概 附図			8月8~9日		京都・池坊短期大学	12名	19	『茶譜』作成のための 校正作業	
10	水指持出手形図 附置様			8月10日	京都・池坊中央研究所		20				
【備考(刊行物等)】『茶譜』巻九注釈(2017年3月21日刊行)											

イラン文化圏における伝統と変容の研究 ―フィールド調査資料の再考―					
No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数	
第8班	1	①石井啓一郎：「アラス川の北から」 ②原隆一・南里浩子：「イラン現地調査報告」 ③鈴木珠里：「フォルグ・ファッロフザードにおける空間」 ④「ノウルーズ文化圏」についての討議	4月24日	大東文化会館	12名
	2	①中村菜穂：「1917年、ガスレ・シーリーン ―詩作と国境―」 ②2016年度の論集の出版計画について	5月29日	大東文化会館	12名
	3	①アブドリ・ケイワン：「日本・イラン経済関係史の概要」 ②斎藤正道：「近代イランの宗教理解：キャスラヴィーの『イスラームについて』から」	6月26日	大東文化会館	12名
	4	①清水直美：「ギーラーン州におけるナクシュバンディー聖所」 ②深見和子：「ペルシア絨織に用いられる天然染料の知識と記憶」 ③鈴木珠里：「フォルグ・ファッロフザードの空間イメージについての一考察 ―紀行文「異国にて」を手掛かりにして―」 ④ソレマニエ貴実也：「ガージャール期の建築と都市について」	7月31日	大東文化会館	15名
	5	①南里浩子：「大野資料コレクション」に向けて ②2016年度の論集の出版計画について (経過報告)	10月23日	大東文化会館	12名
	6	①吉村武典：「前近代のエジプトとナイル川」 ②アブドリ・ケイワン：「経済アクターとしての革命防衛隊：その政治的背景と経済活動の内容」 ③研究班の出版に関する近況報告：①論集『イラン研究万華鏡』刊行、 ②『大野盛雄 フィールド資料 コレクション I』について	1月22日	大東文化会館	12名
	7	イラン研究会 (学会) 研究班合同研究会 (主催校) ①『イラン研究 万華鏡』原隆一・中村菜穂編 (2016年12月) 刊行について ②『大野盛雄 フィールドワークの軌跡 1 ―50年の研究成果と背景―』 原隆一・南里浩子編 (2017年3月) の刊行をめぐって	3月25日 3月26日	大東文化会館	50名
【備考】 1. 刊行物 (1) 中村菜穂「ミールザード・エシュギーにおける政治的ロマン主義の検討 ―詩劇『イラン諸王の復活』を中心に」 (『東洋研究 第201号』、大東文化大学東洋研究所、2016年10月、PP.27-58) (2) 原 隆一、中村菜穂 編著『イラン研究 万華鏡 ―文学・政治経済・調査現場の視点から―』 (大東文化大学東洋研究所、2016年12月、288頁 ISBN 978-4-904626-26-9) 東洋研究所の「イラン文化圏における伝統と変容研究班」の5年間の共同研究の成果。 12名のメンバーによる執筆で、イラン文化圏における文学、政治経済、フィールド調査の多様な視点から考察した論考集。 原 隆一・中村菜穂編 (石井啓一郎、鈴木珠里、中村菜穂、斎藤正道、アブドリ・ケイワン、ソレマニエ (福元) 貴実也、細谷幸子、 深見和子、清水直美、吉田雄介、林 裕) (3) 原 隆一、南里浩子 編『大野盛雄 フィールドワークの軌跡 I ―50年の研究成果と背景―』 (大東文化大学東洋研究所、2017年03月、197頁、ISBN978-4-904626-30-6) 2. 講演会 (1) 中村菜穂「現代イランの詩を読む」東洋研究所公開講座 (2016年11月10日、大東文化会館)					
岡倉天心 (覚三) にとつての「伝統と近代」					
第9班	No.	研究テーマ (発表・演題等) (岡倉天心研究班・「鵬の会」との共催研究会)	開催日時	開催場所	参加人数
	1	『岡倉天心・明治国家形成期における「日本美術」』概要 (田辺清)	8月6日	大東文化会館 404 研修室	10名
	2	中国婦朝報告 (岡本佳子)			
3	今後の活動計画 (塩出明彦)				
【備考 (刊行物等)】					
南アジアにおける社会変動と文化変容：周辺からのアプローチ					
第10班	No.	研究テーマ (発表・演題等)	開催日時	開催場所	参加人数
	1	・2016年度の活動方針の検討 ・班員の本年度 個別テーマについての簡易報告	6月21日	東松山第2研究棟 小会議室	6名
	2	・2016年度の英文図書出版手順の検討 ・報告「現代インドにおける食文化の変容」(篠田隆) ・報告「ネパールにおける自然災害と海外出稼ぎ」(須田敏彦)	7月19日	東松山第2研究棟 小会議室	7名
	3	・2016年度 英文図書出版会議 1	10月18日	東松山第2研究棟 小会議室	2名
	4	・2016年度 英文図書出版会議 2	12月13日	東松山第2研究棟 小会議室	2名
5	・2016年度 英文図書出版会議 3	1月10日	東松山第2研究棟 小会議室	2名	
【備考 (刊行物等)】『Social Transformation and Cultural Change in South Asia ― From the Perspective of the Socio-Economic Periphery (南アジアにおける社会変動と文化の変容―周縁からのアプローチ―)』 (篠田、井上、須田編) (2017年2月28日刊行)					

## 〔国際交流講演会〕 朝鮮朱子学の特質～心に対する探究

東京大学大学院人文社会系研究科助教 金 光来 (キム・カンレイ)  
2017.2.18 (土) 15:00 ~ 於: 大東文化会館 K-401 研修室

朝鮮半島における儒教の歴史は古く、三国(高句麗・百濟・新羅)、高麗王朝時代を通して国家体制や社会規範の確立に大きな役割を果たしてきたが、高麗王朝の末期に元(蒙古)から朱子学が輸入されて以降、儒教はその性格を大きく変えた。

朱子学の本格的な受容は、元の科挙制度を導入したことに始まるといえるが、かくして科挙を通して官界に進出した新興の朱子学者たちは、抑仏揚儒を唱え、徳治主義を掲げて、高麗王朝の内政を改革しようとした。

高麗から朝鮮への王朝交代期には、朱子学を奉じた改革派は政治路線をめぐって対立し、修己の学を重んじて体制内変革を志向する穏健派と、治人の学を重んじて易姓革命を志向する急進派に分裂した。やがて急進派は天命を受けたと称して李成桂政権の基盤形成に尽力し、田制改革を完遂した。朝鮮王朝の成立(1392)がその結果である。

朝鮮王朝は建国後ただちに科挙を実施し、朱子学立国を目指した。成宗期(1469~1494)には、王朝交代期の穏健派の学統を継ぐ士林派が科挙を経て政界に進出するが、権益を独占していた勲旧派は対立する士林派に対して、誅殺や竄流をもって応じた。戊午士禍(1498)、甲子士禍(1504)、己卯士禍(1519)などがそれである。

朝鮮朱子学は、度重なる士禍の結果、一挙に思弁的傾向を強めた。政治に幻滅を感じた士林が性理学理論の探究に沈潜した結果である。その後、明宗・宣祖期に至って在野の遺逸の士が多数登用されたことを機に、儒者は争って性理学の研鑽に励み、漢文学のレベルも格段に向上した。

朝鮮儒学史上最大の争点は、四端七情理気論にあった。いわゆる朝鮮性理学史における「四端七情理気論弁」は、人間感情の根源を理気論的に解明しようとした試みであるが、その起点となった



のが、四端七情の理気分属をめぐって始まった、退溪李滉(1501~1570)と高峰奇大升(1527~1572)の間の論争である。李滉の四端七情論は人間の善性の証明を目的とし、人間の道德感情の根源を理に求める。すなわち李滉は、四端と七情を理と氣に分属し、四端理発・七情氣発と主張した(理氣互発説)。これに対して、心性論における論理的整合性を重んずる奇大升は、具体事物における理氣の「不相離」を強調し、李滉の理氣互発説の理論上の齟齬を指摘した。二人の論争は、8年にわたる攻防の末、一旦終熄したが、その後おおむね奇大升の見解に同調する栗谷李珥(1536~1584)の登場によって再燃した。さらにその学説の違いは、李滉と李珥を学祖とする両政派の党議として機能することになり、論争発生以降約300年も続く、朝鮮儒学の一大テーマとなった。

総じていえば、朝鮮朱子学は理気二元論を朱子哲学体系の核心と捉え、四端七情論を理気論の要諦とし、理気論を中心とする枠組みを整えた。すなわち、李滉・李珥以降、二人の相異なる二つのテーゼ(理氣互発説と氣発理乗一途説)を基礎として発展し、二大学派(李滉後学の嶺南学派・李珥後学の畿湖学派)を形成したのがそれである。

## ■人事

## 兼任研究員に委嘱

【新任】吉村 武典 (国・国際文化学科・講師)

## 兼任研究員に委嘱 (期間:2017年4月1日~2020年3月31日)

【新任】石井啓一郎、大兼健寛、オレグ・プリミアニ、  
笹生美貴子、ソレマニエ (福元) 貴実也、  
深見和子、布村浩一、松本公一

## ■名簿

## 東洋研究所管理委員会委員 (8名)

- 1 岡崎 邦彦 (所長・東洋研究所専任研究員 教授)
- 2 山田 準 (東洋研究所専任研究員 教授)
- 3 日吉 盛幸 (兼任研究員 文・日本文学科 教授)
- 4 中林 史朗 (兼任研究員 文・中国文学科 教授)
- 5 宮瀧 交二 (兼任研究員 文・英米文学科 教授)
- 6 篠永 宣孝 (兼任研究員 経・社会経済学科 教授)
- 7 田辺 清 (兼任研究員 国・国際文化学科 教授)
- 8 鹿 錫俊 (兼任研究員 国・国際文化学科 教授)

## 専任研究員 (4名)

- 1 山田 準 教授 (東西交渉史・貿易史)
- 2 岡崎 邦彦 教授 (中国政治経済)
- 3 小林 春樹 准教授 (東洋暦学)
- 4 田中 良明 講師 (中国思想史)

## 事務室 (2名)

- 1 事務長 横山 美智子
- 2 梓島 康索

## 兼任研究員 (24名) (新任含む)

- 1 日吉 盛幸 (文・日本文学科 教授)
- 2 浜口 俊裕 (文・日本文学科 准教授)
- 3 中林 史朗 (文・中国文学科 教授)
- 4 村井 信幸 (文・中国文学科 准教授)
- 5 小塚 由博 (文・中国文学科 特任准教授)
- 6 宮瀧 交二 (文・英米文学科 教授)
- 7 篠永 宣孝 (経・社会経済学科 教授)
- 8 高安 雄一 (経・社会経済学科 教授)
- 9 葛目 知秀 (経・社会経済学科 准教授)
- 10 C.W.シュパング (外・英語学科 准教授)
- 11 齋藤 俊輔 (外・英語学科 特任講師)
- 12 藏中しのぶ (外・日本語学科 教授)
- 13 田中 寛 (外・日本語学科 教授)
- 14 齊藤 哲郎 (法・政治学科 教授)
- 15 藏田 明子 (法・政治学科 研究補助員)
- 16 内田 知行 (国・国際関係学科 教授)
- 17 柴田 善雅 (国・国際関係学科 教授)
- 18 篠田 隆 (国・国際関係学科 教授)
- 19 滝口 明子 (国・国際関係学科 教授)
- 20 田辺 清 (国・国際文化学科 教授)
- 21 石田 英明 (国・国際文化学科 教授)
- 22 鹿 錫俊 (国・国際文化学科 教授)
- 23 吉村 武典 (国・国際文化学科 講師)
- 24 小尾 淳 (国・国際文化学科 助教)

## 兼任研究員 (47名) (新任含む)

- 1 相田 満 (国文学研究資料館准教授)
- 2 芦川 敏彦 (浜松学芸中・高等学校非常勤教諭)
- 3 アブドリ・ケイワン (神奈川大学 アジア研究センター研究員)
- 4 鎧屋 一 (目白大学外国学部教授・目白大学副学長)
- 5 安保 博史 (群馬県立女子大学教授)
- 6 池田 久代 (元・皇學館大学教授)
- 7 石井啓一郎 (三菱電機株式会社、イラン・トルコ文学翻訳家)
- 8 伊藤 一彦 (中国研究所理事、元・宇都宮大学教授)
- 9 上野 英詞 (日本安全保障戦略研究所 上席研究員)
- 10 植松 希久磨 (大東文化大学非常勤講師)
- 11 江崎 隆哉 (大東文化大学非常勤講師)
- 12 王 宝平 (浙江工商大学 東方語言文化院教授・院長)
- 13 大兼 健寛 (理学・作業名古屋専門学校講師)
- 14 岡倉 登志 (大東文化大学名誉教授)
- 15 岡本 佳子 (国際基督教大学アジア文化研究所 研究員)
- 16 オレグ・プリミアニ (大東文化大学非常勤講師)
- 17 片岡 弘次 (大東文化大学名誉教授)
- 18 菅野 友巳 (大東文化大学非常勤講師)
- 19 小坂 眞二 (陰陽道研究者)
- 20 小林 龍彦 (元・前橋工科大学教授)
- 21 斉藤 正道 (在テヘラン日本大使館調査員)
- 22 笹生 美貴子 (大東文化大学非常勤講師)
- 23 佐藤 志乃 (立教大学兼任講師)
- 24 嶋 亜弥子 (元・在中国日本国大使館経済部専門調査員)
- 25 鈴木 珠里 (大東文化大学非常勤講師)
- 26 ソレマニエ・福元 貴実也 (日本建築学会、地中海学会)
- 27 高木 ゆみ子 (パリ・東アジア文明研究センター研究員)
- 28 中村 聡 (玉川大学教授)
- 29 中村 士 (元・帝京平成大学教授)
- 30 中村 菜穂 (大東文化大学非常勤講師)
- 31 南里 浩子 (東京国際大学非常勤講師)
- 32 布村 浩一 (立正大学非常勤講師)
- 33 林 裕 (関西学院大学人間福祉学部助教)
- 34 原 隆一 (大東文化大学名誉教授)
- 35 深見 和子 (東洋文庫臨時職員)
- 36 福田 俊昭 (大東文化大学名誉教授)
- 37 フレデリック・ジラル (フランス極東学院教授)
- 38 星山 幸子 (愛知淑徳大学非常勤講師)
- 39 細井 浩志 (活水女子大学教授)
- 40 松本 公一 (池坊短期大学教授)
- 41 三田 明弘 (日本女子大学人間社会学部文化学科教授)
- 42 矢ヶ崎善太郎 (京都工芸繊維大学准教授)
- 43 山下 克明 (国際日本文化研究センター共同研究員)
- 44 由川 稔 (ベネフル総合研究所企画部マネージャー)
- 45 吉田 雄介 (神戸学院大学非常勤講師)
- 46 依田 徹 (公益財団法人 遠山記念館 学芸課長)
- 47 渡邊 義浩 (早稲田大学教授)

## 特別兼任研究員 (7名)

- 1 生田 滋 (大東文化大学名誉教授)
- 2 小島 麗逸 (大東文化大学名誉教授)
- 3 近藤 邦康 (東京大学名誉教授)
- 4 進藤 英幸 (無窮会 / 東洋文化研究所名誉所長)
- 5 中島 宏 (中国研究所研究員)
- 6 成田 守 (大東文化大学名誉教授)
- 7 濱 久雄 (無窮会専門名誉図書館長)

『藝文類聚』(巻45) 訓讀付索引

大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 中林 史朗

2017年1月30日発行／B5判 58,36頁／ISBN 978-4-904626-29-0／頒価 3,000円(税別)

「藝文類聚」は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

日本文学関係者からの要望に伴う巻80以降巻89木部に至る植物に関わる巻の読解が昨年迄に一区切り付いたため、本巻よりは歴史研究者からの要望に基づき巻45職官部以降の読解に着手する。

本巻には『藝文類聚』巻45職官部1(総載職官・諸王・相国・丞相・冢宰)の訓読文・校異・注(典拠)・索引を収めている。

《既刊》巻1～巻16、巻80～巻89

『茶譜』巻9 注釈

藏中しのぶ編 相田 満, 安保 博史, フレデリック・ジラルール, 佐藤信一, 高木ゆみ子, 矢ヶ崎善太郎共著

2017年3月21日発行／B5判 272頁／ISBN 978-4-904626-25-2／頒価 ¥12,000(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

本書は、『茶譜』最善本とみなしうる国会図書館本を底本とし、伝存する四種の写本(国会図書館本・静嘉堂文庫本・内閣文庫本・岩瀬文庫本)すべてを校合して【校異】を示し、校訂をくわえた【本文】を掲げ、【訓み下し文】【大意】を加え、さらに若干の【語釈】と【考察】を施したものである。

《既刊》巻1～巻8



大野盛雄フィールドワークの軌跡 I —50年の研究成果と背景—

原 隆一、南里浩子 編

2017年3月15日発行／B5判 197頁／ISBN 978-4-904626-30-6／頒価 10,000円(税別)

本書は、大野盛雄先生が長年にわたる調査研究の現場で残されたフィールドノートや地図、写真やビデオフィルム、テープなどの貴重な一次資料を整理し、50年近くの調査活動の軌跡を辿り、先生自身の目で、また言葉で語らせようと試みたものである。

本書の中心である第2章「研究の軌跡」では、日本、南米、そして西アジアへと研究対象が変わるとともに研究方法や思索が深まり変遷していく様を追っている。

1950年代前半は、日本の農山漁村を中心に社会経済構造分析を基盤にした経済地理学的な調査。そして、1950年代後半に初めての海外調査であるブラジル、パラグアイの現地調査に赴く。その後、1963年イランへの渡航をきっかけに、南米から西アジアへと大きく方向転換する。西アジアの農村調査は、1960年代のイラン、1970年のアフガニスタン、そして1970年代後半から再びイランの農村調査に取り組んでいたところへ1979年2月のイラン革命に遭遇する。国家レベルの政治変動と、革命騒ぎに巻き込まれた一農村の現状分析とその変化過程の追求が1980年代後半までの研究テーマであった。

1990年代からは、これまでの長期定点調査から広域横断型の新たなテーマである「米の道」調査プロジェクトに邁進する。その過程で、もう一つの西アジアの地域であるトルコに大きくシフトし、最晩年の仕事はトルコのアナトリア地方の小都市カマンの調査研究であった。





『イラン研究 万華鏡 ―文学・政治経済・調査現場の視点から―』

原隆一・中村菜穂 編

発行：大東文化大学 東洋研究所／2016年12月23日発行／菊5判10、273頁／

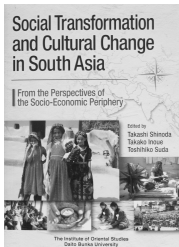
ISBN978-4-904626-26-9／頒価5,000円（税別）

表紙カバー写真：ビジュアル産絨毯（Miri工房制作「Asil」）

写真提供・協力：Miri Collection

ここで、私たちが「イラン文化圏」と呼んでいるのは、現在のイラン国を中心に、周辺のアフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含む広域文化圏のことをいっている。イラン系民族、ペルシア語系言語、太陽暦の春分を新春（ノウルーズ）として祝う古来の慣習や生活リズムなどに特徴がある大きな一括りを指している。それは、インド文化圏、中央アジア・トルコ文化圏、アラブ文化圏など隣接する周辺の文化圏との歴史的交流のなかで育まれたものである。また、文化は、人間の生活舞台である自然生態環境、生業を基盤とした経済・技術活動、その上に展開する社会や狭義の文化を含む総体をここでは意味している。

本書は、多様な視角、様々なプリズムをとおしてみたイラン文化圏における伝統と変容に関する論考集である。詳細は本書にてご高覧あれ。



Social Transformation and Cultural Change in South Asia: From the Perspectives of the Socio-Economic Periphery

『南アジアにおける社会変動と文化変容：社会経済的周縁の視点から』

篠田隆、井上貴子、須田敏彦共編著

2017年2月28日発行／A5版 18、264頁／ISBN 978-4-904626-27-6／頒価7,000円（税別）

本書は現代南アジアの社会変動を周縁の人々（後進階級や女性）の観点から捉え直した学術刊行物である。

本書は、大東文化大学の南アジア研究者が2015年に開催した国際会議の成果であり、東洋研究所の刊行物である。本書には、国内外の研究者による実態調査に基づく9本の独創的な論文と、それらに対する4本のコメントが収録されている。

Takashi Shinoda, Takako Inoue, and Toshihiko Suda(eds.), 2017.

Social Transformation and Cultural Change in South Asia: From the Perspectives of the Socio-Economic Periphery,

Tokyo : The Institute of Oriental Studies, Daito Bunka University,

A4, xviii, 264p. / ISBN978-4-904626-27-6 / Price ¥7,000(+Tax).

This book is an academic publication which examined the social change of modern South Asia from the perspectives of peripheral people (backward classes and female).

The book is the result of the international conference held by Daito Bunka University's South Asian researchers in 2015 and is the publication at the Institute of Oriental Studies. The book contains nine original papers based on field surveys by Japanese and foreign researchers and four comments on them.

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

#### 刊行図書取扱店

##### ■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学2号館B1

TEL : 03-3932-7567 FAX : 03-3932-7544

E-mail : ike-book@smail.plala.or.jp

##### ■汲古書院

〒102-0072 千代田区飯田橋2-5-4

TEL : 03-3265-9764 FAX : 03-3222-1845

E-mail : kyuko@fancy.ocn.ne.jp

##### ■(株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560

TEL : 0493-34-4430 FAX : 0493-34-5622

E-mail : info-daigakuten@shinmeido.co.jp

##### ■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2

TEL : 03-3937-0300 FAX : 03-3937-0955

E-mail : tokyo@toho-shoten.co.jp

第200号 (2016年7月8日発行)

- 渡邊義浩／『搜神記』の引用からみた『法苑珠林』の特徴  
篠永宣孝／中国興行銀行の支払停止 —BIC 救済の挫折—  
篠田 隆／インドにおけるカースト・宗教別の経営展開と社会関係資本  
—「インド人間開発調査」2011/12年版個票データの分析—  
よしかわ  
由川 稔／内陸アジア諸国のマクロ経済的発展と新たな国際開発金融の試み

第201号 (2016年10月25日発行)

- 福井重雅／再考・荀子と法家思想  
中村菜穂／ミールザーデ・エシュギーにおける政治的ロマン主義の検討  
—詩劇『イラン諸王の復活』を中心に—  
中村 士<sup>つこう</sup>／伊豆韮山の天文暦学研究家 江川英毅—天文暦学知識の中央から地方への伝播事例—  
植松希久磨／中国語新語研究「熟語について」—「現代漢語詞典 第6版」の語彙を中心として—

第202号 (2016年11月25日発行)

- 高木ゆみ子／藤原頼長と音楽 —『台記』を中心に (一) 幼少期から大臣大饗まで—  
小塚由博／清代文人の琉球に関する記録 —王士禛『紀琉球入太学始末』及びその周辺—  
濱 久雄／黄以周の礼学思想 —『礼書通故』を中心として—  
岡倉登志<sup>たかし</sup>／「アフリカ分割期」のスーダン —マフディー「国家」とヨーロッパ列強 (上) —  
中村 聡<sup>さとし</sup>／近代アジアにおける『全體新論』の価値とは何か

第203号 (2017年1月25日発行)

- 小林春樹／『漢書』「王莽伝」の述作目的  
相田 満／橋の記憶 —幻ではなかった慶長五年竣工の多摩六郷橋—  
藏中しのぶ／女田楽・旦開野の「賛」と「肖像」  
—『南総里見八犬伝』第六輯巻頭口絵の「兔」「雀」—  
伊藤一彦／中国における朝鮮戦争の再評価  
岡崎邦彦／西安事変と周恩来 (中) —事変の和平的解決の決定—  
柴田善雅／大連都市交通株式会社の「満洲国」投資

『東洋研究』の取扱は東洋研究所事務室となりますので、購読希望の際は事務室にご連絡ください。

・大東文化大学 東洋研究所

〒175-0083 板橋区徳丸2-19-10

Tel 03-5399-7351 Fax 03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

・年間購読料：6,000円 (1冊 1,500円・税込、送料込)

・支払方法：指定銀行口座振込 (振込手数料は購読者負担)

## 東洋研究所の理念・目的

東洋研究所の起源は1921年の貴・衆両院による「漢学振興二関スル建議案」の決議に由来する。この背景にある基本的理念は、①漢学を中心とする東洋学術の研究、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざすことにあった。

この理念実現の推進母体として1923年大東文化協会が創設され、研究組織として、①漢学を中心とする東洋学術の研究部門として東洋研究部を、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざす比較研究部を設け、教育機関として大東文化学院を設立した。

この二つの研究部は1953年学校法人大東文化大学付属大東文化研究所に継承され、1961年学校法人大東文化学園の振興計画の一環として、新たに「東洋研究所」として過去の①・②の理念を継承している。

東洋研究所の目的は、学則第5条第3項に基づく大東

文化大学東洋研究所規程によって定められ、「アジアを中心とする人文・社会・自然の科学的調査研究を行い、ひろく学術の発達に寄与すること。」とされている。

当初、研究局第一部人文科学系と第二部社会科学系の2組織がおかれ、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれての研究活動に入った。

時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌『東洋研究』に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果を地域社会への還元として公開講座を開催し、国際交流の一環として、外国人講師による講演会等学術の発達に寄与することを目的に活動している。

(2014年7月)

## 2016年度 東洋研究所会議報告

### ■管理委員会

①日時：2016年5月6日（金）10:30～

場所：東洋研究所共同研究室

〔議案〕

1. 東洋研究所 予算に関する事項について
2. 2015年度 東洋研究所公開講座の実施について
3. 2015年度 東洋研究所出版計画について
4. 2015年度 東洋研究所の事業計画に関する事項について
5. 2015年度 東洋研究所の共同研究計画書について
6. 2017年度「東洋研究」掲載論文執筆のお願いについて
7. 東洋研究所所蔵図書の見直しについて
8. 昇任人事について

②日時：2016年7月16日（土）15:00～

場所：東洋研究所共同研究室

臨時管理委員会

〔議案〕

1. 昇任人事（岡崎邦彦准教授）について

③日時：2016年11月2日（水）10:30～

場所：東洋研究所共同研究室

〔議案〕

1. 2017年度 共同研究計画書（案）について
2. 2017年度 東洋研究所 出版計画について
3. 2017年度 予算積算について
4. 東洋研究所研究員（兼任研究員）の人事について
5. 2016年度 研究活動報告会、国際交流講演会、管理委員会の実施について（2017/2/18）

6. 東洋研究所特任准教授（歴史資料館出向）の契約更新人事について

7. 東洋研究所 共同研究部会、兼任研究員に関する内規について

8. 東洋研究所 次期所長について

④日時：2017年2月18日（土）12:00～

場所：大東文化会館 K-0302 研修室

〔議案〕

1. 東洋研究所刊行物の発行状況について
2. 研究活動報告会および国際交流講演会について
3. 東洋研究所専任研究員兼任依頼について
4. 2017年度 管理委員会委員の任期更新と承認について
5. 2017年度 兼任研究員更新及び新任の兼任研究員の承認について
6. 専任研究員の兼職依頼について
7. 2017年度 会議日程及び秋の公開講座日程について
8. 「東洋研究」執筆依頼（メール用）について
9. 「東洋研究」編集長について
10. 東洋研究所 次期所長について

### ■所内会議（於：東洋研究所共同研究室）

2016年 4月14日（木）	2016年 4月21日（木）
2016年 5月19日（木）	2016年 6月23日（木）
2016年 7月 7日（木）	2016年 9月29日（木）
2016年 10月20日（木）	2016年 10月27日（木）
2016年 12月 1日（木）	2016年 12月22日（木）
2017年 1月19日（木）	2017年 2月16日（木）

# 2017年度 東洋研究所 公開講座のお知らせ 「アジアの民族と文化」

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
<p>11月9日(木) 13:00～15:00 現代日本に生きる 古代中国の遺産 ～「年号」、その他を中心として～ 東洋研究所 准教授 小林 春樹</p>	<p>「昭和」、「平成」など、現代の日本において使用されている「年号」は、いまから2000年以上も昔の紀元前114年に、前漢の武帝が、彼が即位した紀元前140年にさかのぼって「建元」という年号をたて、その年を「建元元年」としたことに始まる年代の教え方です。 今回は「年号」のように、現代に生きる私たちの生活と密接な関係を有している古代中国の「遺産」をアカルト的に紹介することによって、日本と中国との深く、長い関係を再確認したいと思っています。</p>
<p>11月16日(木) 13:00～15:00 ペルシアの伝統技術 ～沙漠の知恵、 したたかに生きるイラン人～ 東洋研究所 兼任研究員 大東文化大学 名誉教授 原 隆一</p>	<p>乾燥という厳しい環境のなかにあって、その厳しさを逆手にとりながら、したたかに生きるイラン・アリア民族の歴史と文化について、在来生活技術に焦点を当てながら話したい。具体的には、地下灌漑用水路「qanat」、製粉水車「asiyab-e abi」、沙漠から吹く120日の風を利用した製粉風車「asiyab-e badi」などをとりあげる。 その際、私の現地での生活や調査経験などを踏まえながら話す。それは、過去を懐かしむのではなく、未来に向かっての持続的再生可能エネルギー装置としての可能性を十分にふくんでいるからである。(以下の3冊を参考文献とする。) 原 隆一 著『イランの水と社会』(古今書院 1997年) ハンス・E・ヴルフ 原隆一ほか共訳『ペルシアの伝統技術～風土・歴史・職人～』(平凡社 2001年5月) 原隆一、南里浩子編『大野盛雄 フィールドワークの軌跡①～50年の研究成果と背景～』(大東文化大学 東洋研究所 2017年3月)</p>
<p>11月23日(木・祝) 13:00～15:00 李白伝説と蕪村の文事 東洋研究所 兼任研究員 群馬県立女子大学 教授 安保 博史</p>	<p>蕪村の俳諧や文人画の世界は、種々の李白伝説に基づいて創作されている。 月を捉えようと湖に死す李白、鯨に乗る李白、「一斗詩百篇」の李白、楊貴妃に墨をすらせ、帝の御前で詠作する「酔李白」など、枚挙に暇がない。 本講座では、俳系の上で其角に繋がる蕪村グループの李白伝説受容の諸相に触れつつ、彼らの文事の豊穡を楽しみたい。</p>

■受講料：1回 500円(各回当日支払)

■定員：50名(先着順)

■受付期間：11月6日(月)まで(消印有効)

■会場：大東文化会館 3階 K-302 研修室

■交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分

〔問合せ先〕 大東文化大学 東洋研究所

TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

※ 注意事項

- ・事前のお申し込みが必要です。問い合わせは、東洋研究所事務室までお願いいたします。
- ・受付は先着順とさせていただきます。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車でのご来場はご遠慮ください。

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.67

2017年7月31日発行

印刷：(株) 東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL http://www.daito.ac.jp